

一宮市庁舎（一宮市役所本庁舎）

所在地 一宮市本町2丁目
所有者 一宮市

竣工年 昭和5年(1930)
構造等 鉄筋コンクリート造

大正3年(1914)からの第一次世界大戦は、国内における毛織物業躍進の契機となりました。尾西地方においても毛織物業の増大を背景に、織物業は隆盛し、人口の急増も著しく一宮町は発展していきます。そうした中の大正10年(1921)9月1日に一宮町民の宿願であった市制が施行され一宮市が誕生します。市役所の庁舎は旧町役場建物(写真2)が引きつづき使用されていましたが、新築が望まれたため、同11年仮庁舎としての旧一宮高等女学校校舎(市内新町)へ移転した後、昭和4年(1929)に新庁舎の建設がはじまりました。竣工は翌5年10月5日で、延べ2万4百人の人員と24万円の費用がかかったとあります。新しい庁舎は鉄筋コンクリート造二階建、現在は取り壊されて残っていませんが高さ84尺(25.5m)の展望塔もありました。

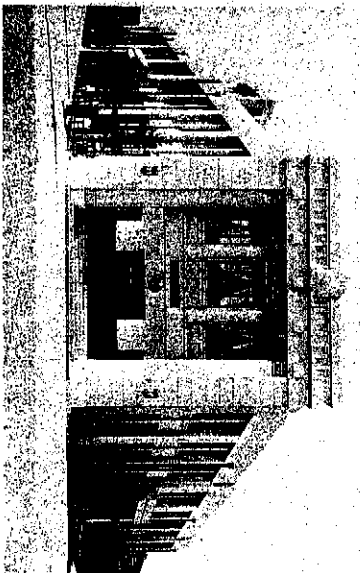


写真1 一宮市庁舎正面(昭和5年)

さて、建物の外部は人造石塗^{（1）}で仕上げられ(取り壊された西側の棟はモルタル塗)、正面玄関(大玄関)にあたる東側(隅切部)を中心に装飾をみることが出来ます。(写真1) 両サイドに大きな柱が立ちあがった正面の玄関まわりは、懐かしく、中央、両脇と三つの出入り口があり、頭上に張りだしたバルコニーには小さな4本の柱が取りついています。

一方内部は、玄関から中へ入ると、左右には「公衆留」と呼ばれる通路兼窓口・待合用の細長い空間が奥へと続き、その内側には大理石のカウンター越しに、庶務係・衛生係・産業係などが配置(当時)されていた事務室(写真3-1,3-2)が広がっています。

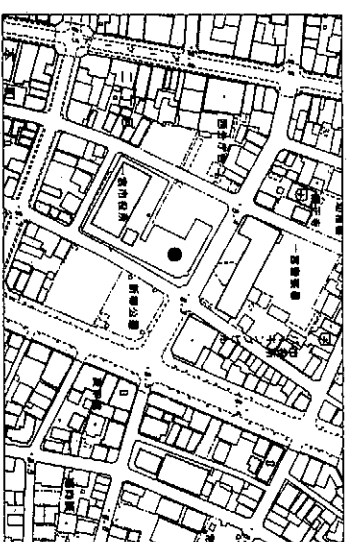


図1 所在地

再び大玄関に戻り直進すると、花崗岩製の手摺を備えた階段があり、2階へと通じています。竣工時には、階段はリリウム敷きの広間(現・廊下)へと導き、右手には式場(現・事務室など)・議場(写真 4-1,4-2)などが、正面には洋室の貴賓室(写真5-1)(現・記者クラブ)がありました。

貴賓室の室内は絨毯が敷かれ、ソファーやテーブル、衝立などの調度品が置かれていました。また壁装は、腰廻に大きな木の板を張りつけ、その上部には壁紙を張っていました。当時の記録には、壁の仕上げは「テツコー貼り」の記載がありますが、「テツコー」とはドイツの壁紙メーカー、サルメラ(現在はサルメラテツコー)社の商品名ですので、輸入物の壁紙を使用していたことがわかります。

貴賓室は庁舎内の度重なる改修により現在その姿を失いましたが、当館には調度品のタペストリーを張った衝立が収蔵され、テーブルやソファー、椅子(ただし布地は張り替えられている)は一宮市消防本部に残されています。

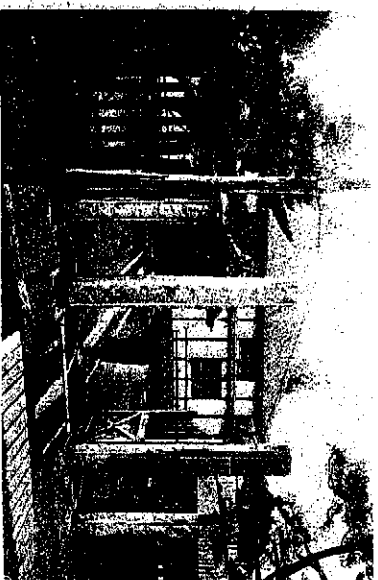


写真2 一宮町役場時代からの建物

しており(写真5-2)、当時の雰囲気を保っています。さて昭和35年になると、手狭となった従来の建物の南西続きに新館(鉄骨鉄筋コンクリート造 地下1階地上4階建)が建設されます。昭和46年には、その新館上部への建て増し(1階～5階鉄骨鉄筋コンクリート造・6F～10F鉄骨造)が完工し、おおもね現在の一宮市役所本庁舎の姿となりました。

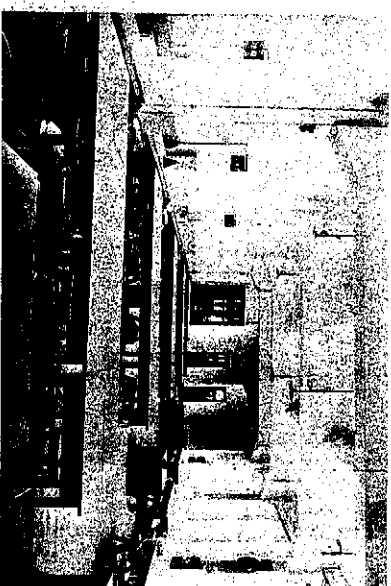


写真3-1 1階事務室



写真3-2 現在の事務室付近

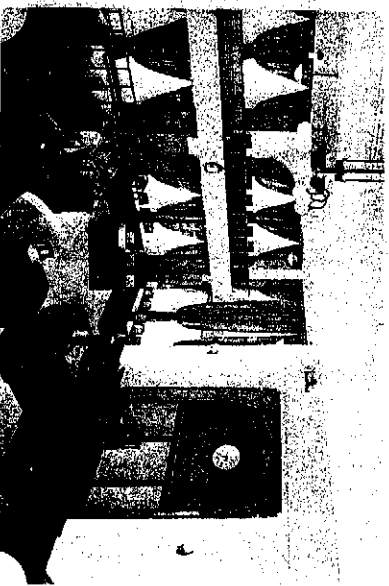


写真4-1 議場

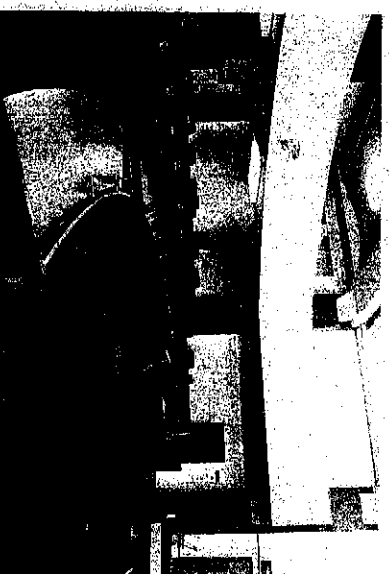


写真4-2 現在の議場



写真5-1 貴賓室



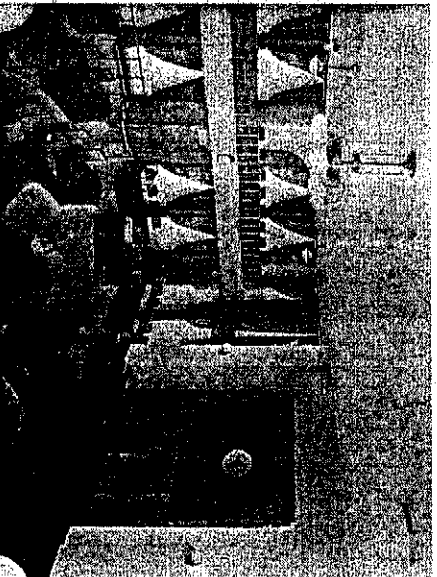
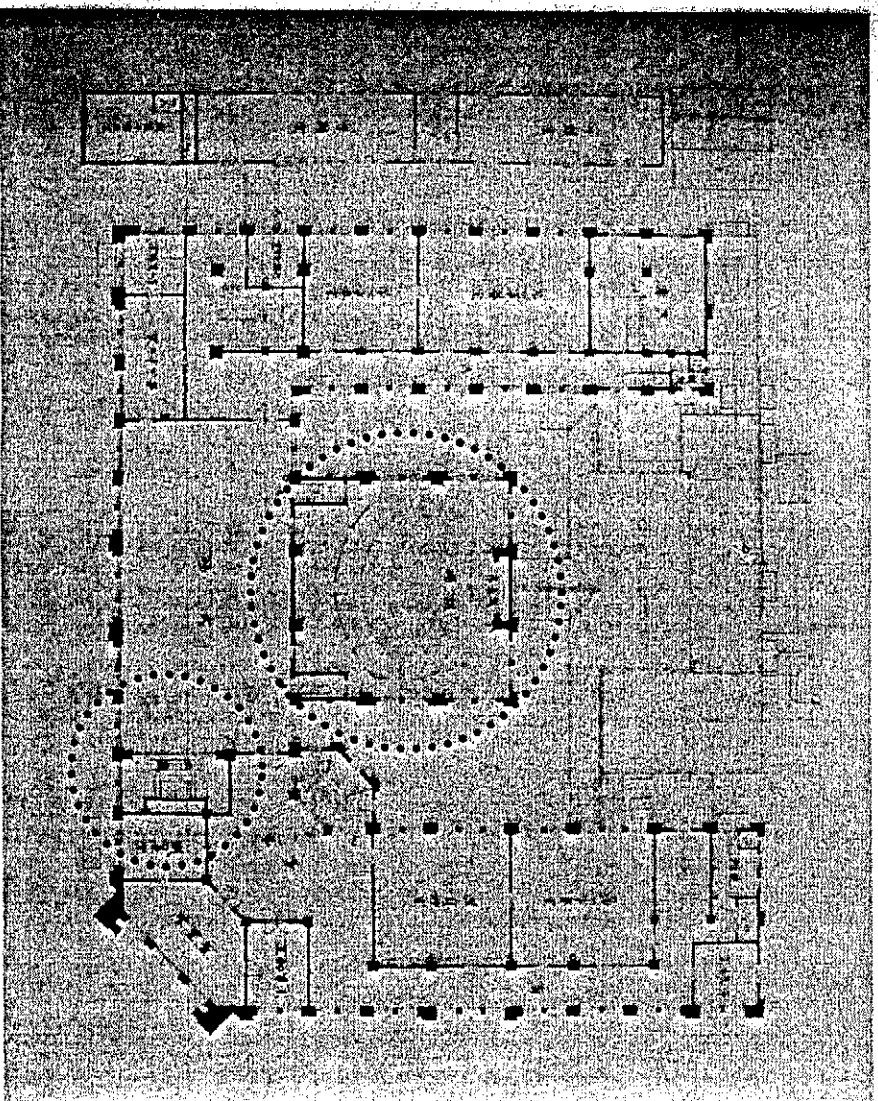
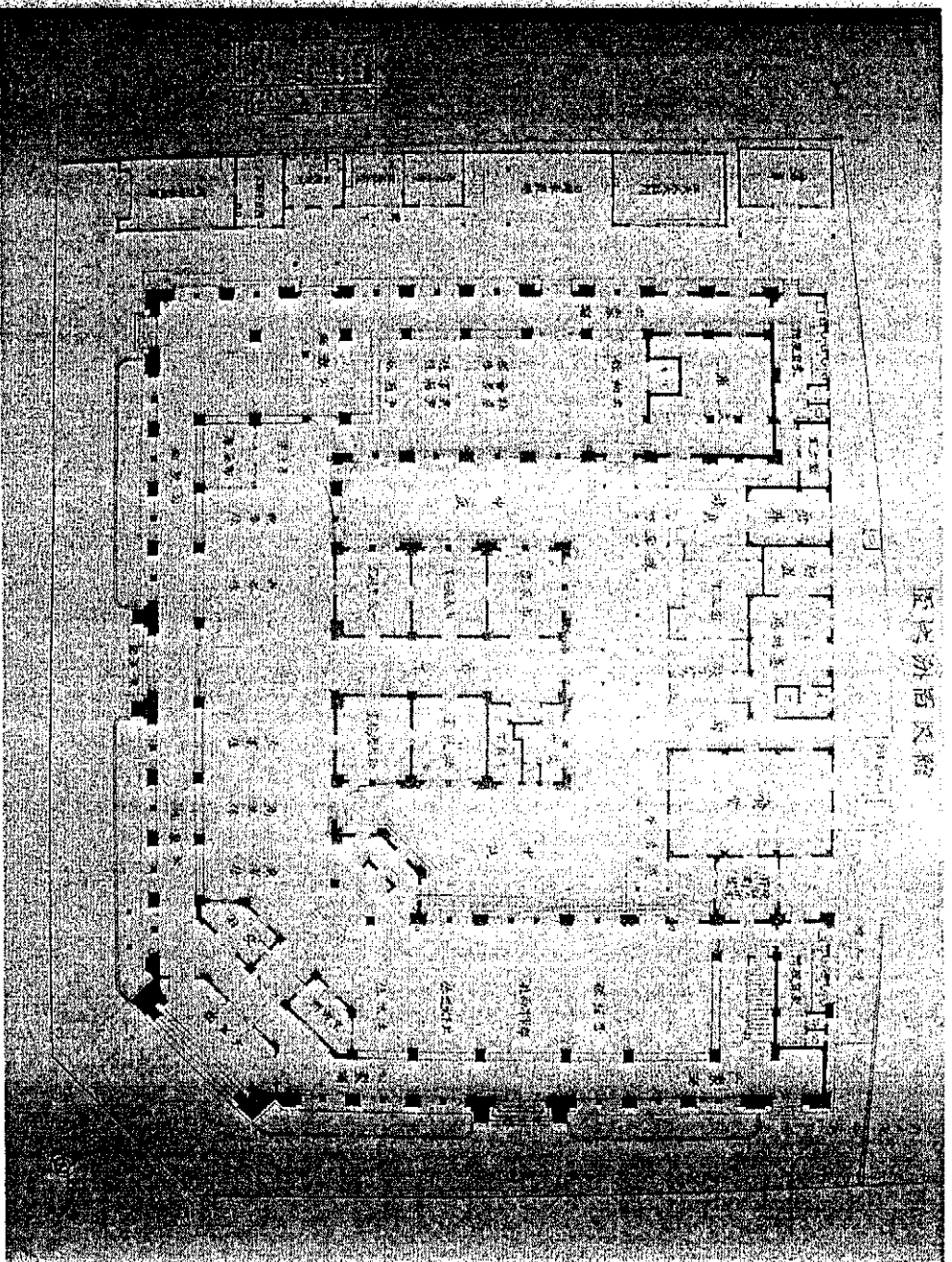
写真5-2 消防本部に伝わる貴賓室調度品

[注] (1) 人造石塗
セメントと細かい碎石を用いて、天然の石材の質感を模倣した塗仕上げ。
写真2は「一宮町案内」、写真3-1,4-1,5-1は「一宮市庁舎新築記念」より

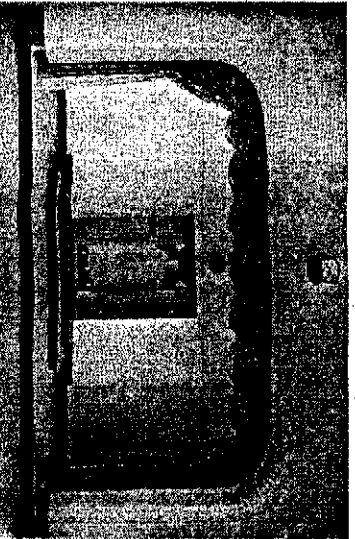
建築学的評価

- i) 地方庁舎の典型例→RC造2階建、議場併設、E字型平面(議場を中庭に張り出す)
- ii) 日本最初のカウンター方式採用庁舎→定説:小樽市役所・静岡市役所(1934年)

1F
中庭
2F



議場



下庁

